

# 助産学生による妊娠期からの継続支援に関する文献検討—対象者の視点から—

## Literature review on midwifery students' support for continuity of pregnancy - From the Subject's Perspective-

藤原 弘子

Hiroko Fujiwara

### 要旨

【目的】助産学生による妊娠期からの継続支援を受けた対象者の経験，支援に対する評価を文献より明らかにし，助産師による妊娠期からの継続支援の示唆を得ることである。

【方法】医学中央雑誌，PubMed を用い，助産学生の継続支援に関する文献を検索した。

【結果】対象論文は6件，研究対象がパートナーの論文は見当たらなかった。助産学生に受け持たれたほとんどの対象者は，助産学生によるケアに満足していた。しかし，肯定的意見だけでなく，技術の未熟さから実習上の問題も指摘されていた。妊娠期からの継続的な支援により，対象者と助産学生との間で信頼関係が構築されていき，提供されるケアが個別化され，支えとなり，出産の満足感につながっていた。

【結論】助産学生による継続支援を受けた対象者のケアに対する全体的な満足度は高かった。助産師の妊娠期からの継続支援の対象としてパートナーを含めて考えていくことが，今後必要である。

### Abstract

**Objective :** The aim of this study is to elucidate the experiences of individuals who received continuous support from midwifery students throughout their pregnancy and to evaluate this support based on literature findings. It also seeks to gather recommendations for ongoing support from midwives starting from the pregnancy period.

**Method :** We searched the Central Journal of Medicine and PubMed for literature on midwifery students' continuous support.

**Results :** Six articles were included in the study, but no articles were found where the research subjects were partners. Most subjects cared for by midwifery students expressed satisfaction with the care provided. However, alongside positive comments, issues in practice due to the students' inexperience with techniques were also noted. Continuous support from the pregnancy period fostered a trusting relationship between the subjects and the midwifery students, leading to individualized, supportive care and overall satisfaction with the birth experience.

**Conclusion :** Subjects who received continuous support from midwifery students reported high satisfaction with their care. Future considerations should include extending continuous support from midwives to include partners from the pregnancy period.

キーワード：助産学生，継続支援

**Key Word** : midwifery student , Continuous Support

## I. 緒言

日本助産師会は助産師の役割・責務の中で助産師は、妊娠期、分娩期、産褥期、乳幼児期における、母子および家族のケアの専門家である。よって、全期を通じて母子および家族に必要なケアを提供する。自己の責任のもとに正常な分娩を介助し、新生児および乳幼児のケアを行う<sup>1)</sup>とある。少子化、産科施設の集約化、出産年齢の高齢化に伴うハイリスク妊産婦やハイリスク新生児の対応など周産期を取り巻く環境は多くの課題が山積し、助産師の実践能力強化が求められている。コクランレビューでは、助産師主導のケアを受けた女性は、会陰切開や器械分娩を受けた女性は少なく、自然経膈分娩の確率も高く、帝王切開分娩の回数に差はなかった。また、早産になる可能性が低く、赤ちゃんを失うリスクも低かった。これが意味することとして、ほとんどの女性に「助産師主導の継続的ケア」を提供すべきであると助産師主導の継続ケアを推奨している<sup>2)</sup>。また、助産師によるケアの継続性は、女性の出産に対する満足度を上げることが明らかとなっている<sup>3)</sup>。妊娠期から継続して関わっている助産師がそばにいることによる安心感だけでなく、妊娠期から正常な経過をたどるための対象の個性に応じた支援が分娩経過や出産に対する満足度を高める要因になっていることが推察される。

保健師助産師看護師学校養成所指定規則では「実習中分べんの取扱いについては、助産師又は医師の監督の下に学生一人につき十回程度行わせること、実習期間中に妊娠中期から産後1か月までを継続して受け持つ実習を1例以上行うこと」<sup>4)</sup>とされている。この妊娠期から産後まで継続して受け持つ事例を継続事例というが、その継続事例実習において助産学生が、妊娠期から継続的な関わりの

中で対象に応じた保健指導を実施するためには対象を知ることの大切さや、よりよい分娩期・産褥期へと対象を導くために先を見据えた妊娠期からの指導の大切さについて、実習を通して学んでいた<sup>5)</sup>。また、継続事例実習指導に関わる指導者からの視点では、継続事例実習が診断・技術や助産師としての責任や態度につながることを示唆されている<sup>6)</sup>。これまで明らかにされてきた助産学生、実習指導者からの視点ではなく、実際に継続支援のケアの受け手である妊婦とそのパートナーの継続支援に対する評価や経験を明らかにすることで、助産師の妊娠期からの継続支援への一助となる。

そこで本研究の目的は、助産学生による妊娠期からの継続支援を受けた対象者の支援に対する評価、経験を明らかにし、助産師による妊娠期からの継続支援の示唆を得ることである。

## II. 方法

国内文献は、医中誌 Web Ver.5 において「助産学生」「継続」のキーワードを組合せ、「原著」で検索を行った。海外文献は、PubMedにおいて「midwifery student」「Continuity of care」で検索を行った。対象論文は2010~2023年とした。文献の選択基準は継続支援を受けた対象者の助産学生の支援に対する評価、体験等を明らかにしたものとし、タイトル・抄録から文献を選定、論文を精読し、最終的な文献の選定を行った。今回は、助産学生による継続支援を受けた対象者の体験、継続支援に対する評価を明らかにするため、研究対象は助産学生に受け持たれた女性及びパートナーとし、研究対象が助産学生、臨床指導者のみは除外した。また、重複論文、日本語・英語以外の言語は除外した。抽出さ

れた文献を精読し、著者（発表年）、調査された国、目的、研究デザイン、データ収集方法、結果を整理した。文献ごとに結果から助産学生による継続支援を受けた対象者の経験、評価に関する記述を抽出し、まとめた。

### III. 倫理的配慮

対象文献からデータを抽出する際には、著者の意図や意味が損なわれないよう配慮した。

### IV. 結果

医中誌 Web においては 17 件、PubMed においては 159 件が検出された。除外基準にそって選定した結果、対象論文は 6 件であった（表 1）。パートナーを研究対象とした論文は見当たらなかった。

#### 1. 助産学生による継続支援の評価

助産学生に受け持たれた対象者であるほとんどの女性は、助産学生によるケアに対する全体的な満足度を「期待していたよりも良かった」と評価していた<sup>7) 8) 9)</sup>。しかし、肯定的な意見だけではなく、技術の未熟さ<sup>10)</sup>や自信過剰、あるいは自信不足の学生、学生が約束の面会に出席しなかったり、出産に立ち会わなかったりした場合には女性は失望していた<sup>11)</sup>。

#### 2. 対象者にとっての継続支援の経験

助産学生による妊娠期からの継続的な関わりは、【実習の進行に伴い思いが変化】し、【精神的な支え】となり、【出産の満足感】につながっていた。

1) 【実習の進行に伴い思いが変化】助産学生に受け持たれた対象者の思いは、学生実習依頼を受けた時・妊娠期・分娩期・産褥期の各期で明確に異なることを明らかにしている。実習の進行に伴う学生に対する思いの変化として「徐々に自然な形で打ち解けていった」という対象者と、「不安と信頼感が比例していった」という対象者の 2 つのパターンが抽出

されていた<sup>12)</sup>。

2) 【精神的な支え】妊娠期からの継続した関わりから、対象者と助産学生との深い関係が可能になり、提供されるケアがより個別化され、精神的なサポートを与え、出産の準備を整えることができていた。陣痛と出産の間、対象者について知っている助産学生の存在により、対象者は出産のプロセスに集中することができていた。予期せぬ出来事が起こっても、助産学生との関係性により前向きな出産体験をすることができていた。継続されたケアは、対象者が安心して世話を受けていると感じることができ、好ましいケアのモデルであることを明らかにしていた<sup>13)</sup>。また、助産学生による「支え」となった関わりの内容として、①共感し受け止める②常にいる③一生懸命対応する④不安や悲しい時のタッチングの 4 つが明らかとなっている<sup>14)</sup>。

3) 【出産の満足感】対象者である女性たちは、助産学生がパートナーと両方にサポートと情報を提供し、それによって女性をより安全に感じさせ、出産プロセスにより集中させた。そして、出産経験について身近な人と話し合うことで、出産経験の重要性が高まることを明らかにしている<sup>15)</sup>。また、助産学生との親密さとの経験が出産経験にとっても重要であることが明らかとされていた<sup>16)</sup>。

### V. 考察

#### 1. 助産学生による継続支援の評価

日本において継続事例実習は、妊娠中期から産褥期にかけて 1 事例程度となっているが、今回の対象論文となったオーストラリアの助産師教育では、分娩を含んだ継続事例は 20 例とされ、全ての助産師学生がこの基準の達成を求められている<sup>17)</sup>。日本においては、大学 4 年間の中で助産師資格取得するコースから大学院 2 年間まで助産師教育課程、

表1 助産学生による継続事例実習に関する研究の概要

筆頭著者, 年, 国	研究目的	研究対象者	研究デザイン/ データ収集方法	結果
1 福丸洋子他, 2010, 日本	継続事例実習で助産師学生に受け持たれた女性の学生実習に対する思いとその変化を明らかにする	継続事例実習で受け持たれた女性10名	質的研究/半構造化面接	思いは、学生実習依頼を受けた時・妊娠期・分娩期・産褥期の各段階で明確に異なる。実習全体について「学生だけでなく多くの人が関わってくれてよかった」と評価。実習の進行に伴い学生に対する思いの変化も見られた。
2 荒木美幸他, 2010, 日本	学生のどのような関わりが「支え」となったのか知り、助産師教育中の継続受け持ち実習の意義を再確認する	継続事例実習で受け持たれた女性13名	質的記述的研究デザイン/半構成的面接	学生による「支え」となった関わりの内容は全部で87抽出され、内容別に①共感し受けとめる②常にいる③一生懸命対応する④不安や悲しい時のタッチングの4つのカテゴリーに分類された。
3 Unn Dahlberg, 他, 2013, ノルウェー	出産過程における関係性の連続性が女性の出産経験にどのような影響を与えるかを検討すること	継続的なケアを経験した女性23名	Q-方法論的アプローチ/質問紙調査	助産学生との心理的信頼関係やチームワークの感覚を表し、どちらの因子も、関係における質の重要性を示していた。因子1は、関係における存在感と感情的なサポートの経験を表している。それはまた、彼女たちの個人的な成長感を表していた。第2因子は、関係やプロセスにおける予測可能性の経験と、関係における相互依存の感覚によって定義された。第2因子を定義する女性は、関係における継続性だけでなく、内容が産産体験にとって重要であることを経験していた。
4 N.Tickle,他, 2016, オーストラリア	助産学生からの継続してケアを受けた女性の経験を明らかにする	最近の出産経験において助産学生による継続的ケアに同意し、産後6週間の訪問を終えた者(n=698)	後方視的記述コホートデザイン/質問紙調査	女性は、助産学生が継続したケアを提供してくれることに非常に満足していた。産前・産後の訪問回数と、女性の助産学生に対する満足度との間には、有意な正の相関関係がみられた。質的調査では、ほとんどの女性が助産学生と良好な関係を築いており、それが出産経験を高めていることを示す追加的な洞察が得られた。 この研究の女性の大半は、次の妊娠でも助産学生に継続したケアを提供してもらうことを選択し、家族にも助産学生を勧めたいと考えている。
5 N.Tickle,他, 2021, オーストラリア	助産学生による継続的ケアの経験について、女性を対象とした日常的なウェブ調査のデータを評価する	12ヶ月間の継続ケア体験の女性全員(n=886)	横断研究/Web調査	ほとんどの女性が、助産学生によるケアに対する総合的な満足度を「期待していたよりも良かった」と評価した。産前訪問の回数と産後の助産学生との接触回数の間には、女性が感じる満足度と尊敬度の両方に正の相関が認められた。助産学生が陣痛や出産に立ち会うことで、女性はより満足を感じていた。
6 Ingvild Aune, 他, 2023, ノルウェー	出産過程における助産学生による継続的ケアに関する女性の経験について理解を深める	助産学生による継続的なケアを出産過程で受けた女性9名	質的研究/インタビュー	「パートナーシップの始まり」と「ケアの継続性の影響」という2つのメインテーマと、「ケアの継続性が深い関係を可能にする」、「精神的なサポートの経験」、「分娩のプロセスに集中する」、「有意義な経験」という4つのサブテーマが浮かび上がり、女性の助産学生による継続的なケアの経験を啓発した。

期間は様々である。2015年に行われた助産学実習における継続事例実習の現状と課題の調査では、実習施設および継続事例実習対象者の確保、教員不足があった<sup>18)</sup>。現状において、様々な教育背景、課題はあるが、日本の助産師に求められる必須の助産実践能力「助産師のコア・コンピテンシー」の4つの要素のうちの一つ「マタニティケア能力」では、助産師は、妊娠期、分娩期、産褥期、乳幼児期における、母子および家族のケアの専門家であることや自己の責任のもとに正常な分娩を介助し、新生児および乳幼児のケアを行うと明記されている<sup>19)</sup>。助産師として、母子にとって安全で、満足のできる分娩期、育児期へと導く力、実践力を身につけるためにも継続事例実習を価値あるものとしていく必要がある。

継続事例実習の評価として、肯定的意見だけでなく、技術の未熟さから実習上の問題も指摘されていた。瀬谷は初対面の助産学生に受け持たれた産婦の体験として、産婦の中には学生に産婦が必要とする言葉かけをしてもらえなかったことや不快な行為をされたことへのわだかまりを持っている者もいたことを明らかにしている<sup>20)</sup>。看護師経験の無い助産学生は、看護技術に関して、学内演習、看護学実習のみの経験である。助産学実習においては、分娩介助などの助産技術だけではなく、全身清拭や導尿など基礎看護技術の実施もあり、学内演習のようなモデル人形や学生同士ではないため緊張を伴う。学内で助産技術や基礎看護技術を演習、習得し実習に臨むが、分娩経過や対象者は1人1人違うため学内で十分に演習を行っても、学生は戸惑う。

分娩介助という緊張度の高い実習の中では、学内演習を重ねても自分の持てる力を100%発揮するのは難しいことが推察される。助産学生が関わる全ての対象者が、自分の望む、そして安心して分娩できるような知識と技術の習得が助産学生には必要である。また、初

対面の対象者の分娩介助となれば、コミュニケーションをとる段階から学生にとっては課題となることがある。陣痛で痛みを訴える産婦に対して、話しかけることもできない学生もいる。「看護基礎教育検討会報告書」では、看護職員のコミュニケーション能力向上のための教育がより一層強化される必要があると報告されている<sup>21)</sup>。このことから学内演習において助産・看護技術の習得だけではなく、コミュニケーション技術などについて、演習方法の検討も必要である。このコミュニケーションに関して、継続事例実習では、妊娠期からの関わりで対象者とのコミュニケーションもとれているため、コミュニケーションを苦手とする学生にとっては心理的負担が少ないことが予測される。

また、助産師教育の新カリキュラムにおいて産後うつや虐待等の支援として、地域における子育て世代を包括的に支援する能力が求められていることから、産後4か月程度までの母子のアセスメントを行う能力を強化するために地域母子保健の内容を充実させることが示されている<sup>22)</sup>。継続事例実習において、妊娠期から育児期にかけての継続的な支援を経験することは、学生にとって今後の助産師として働いていく上での継続支援の実際や必要性を学ぶ機会でもあり、そのためのスキルを身につけることもできる。

## 2. 対象者にとっての継続支援の経験

助産学生による妊娠期からの継続的な関わりは、【実習の進行に伴い思いが変化】し、【精神的な支え】となり、【出産の満足感】につながっていた。WHOはポジティブな出産体験のための分娩期ケアとして、助産師主導の継続ケア（midwife-led continuity-of-care:MLCC：女性がすでに知っていて信頼している一人、または少数の助産師から、妊娠期、出産、産後を通してケアを受けること）を妊産婦へ提供することを推奨している<sup>23)</sup>。

先行研究からも助産学生による妊娠期からの継続的な支援は、安心して妊娠期から育児期にかけて過ごすための心理的な支援となっていた。継続事例実習において、受け持たれた対象者の思いは実習の進行に伴い関係性も深まることで、肯定的な評価へと変化していた。助産学生は継続事例実習において、妊娠中からの継続的な関わりの中で、妊娠各期に必要な身体を整えるための助言や注意事項を伝え、出産に向けて心と身体の準備を行う。継続的な関わりの中で、対象者の特性、背景を踏まえ、対象者が望む出産となるような関わりも行っており、それが出産体験の満足感にもつながっていた。また、出産がゴールではなく、新生児を迎えた育児期のスタートがスムーズにきれるよう育児に必要な知識と技術を伝えるなど、先を見据えた継続的な支援を継続事例実習では実施している。

出産で入院した際、初めて会う助産師の対応よりも顔見知りである学生がいることで安心感につながる。学生だけでなく産婦となる対象者も学生との間で、コミュニケーションがとれ、信頼関係も構築されていることで、リラックスした状態で出産に集中することができる。この信頼関係の構築が対象者の継続事例実習に対する満足感にもつながっている。助産学生は、知識・技術は未熟ではあるが、対象者の近くに常にいて、一生懸命対応することが対象者の支えとなっていた。自分のことをわかってくれる人が出産時にそばにいてくれることが対象者の支えとなり、安心、安堵につながっていることが明らかとなっていた。

助産師主導の継続ケア（midwife-led continuity of care：MLCC）では、1人ひとりの女性が妊娠・出産を通して、1人、または少数の助産師のみからケアを受けるために、十分に訓練された助産師を相当数必要としており、このことから母児ともに安全に分娩が終了できるよう知識や看護・助産技術を習得

させることが、我々教員の責務であるといえる。

今回、先行研究での研究対象者はすべて女性であったが、女性が安心して妊娠期を過ごすためにはパートナーとの関係、支援状況は大切なアセスメントの視点である。先行研究にあったように女性だけでなくパートナーへの支援により、女性はより出産プロセスに集中できる。政府は、成育過程にある者及びその保護者並びに妊産婦に対し必要な成育医療等を切れ目なく提供するための施策の総合的な推進に関する法律（成育基本法）第11条第7項の規定に基づき、成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針の中で（父親の孤立）として「母親を支えるという役割が期待される父親についても、支援される立場にあり、父親も含めて出産や育児に関する相談支援の対象とするなど、父親の孤立を防ぐ対策を講ずること」が明記されている<sup>24)</sup>。パートナーを含めた妊娠期からの継続的な支援は、その後の育児期にも影響してくるため、支援の対象として女性だけでなくパートナーも含めて考えていくことが重要である。また、これまで明らかにされていない妊娠期からの継続支援に対するパートナーの経験についても明らかにすることが、今後の助産師による妊娠期からの父親支援の一助となることが推察される。

## VI. 結語

助産学生による継続支援を受けた対象者の体験について、先行研究によって明らかとされているが、研究対象がパートナーである父親は見当たらなかった。助産学生による継続支援を受けた対象者である女性のケアに対する全体的な満足度は高かった。助産学生による妊娠期からの継続的な関わりは、【実習の進行に伴い思いが変化】し、【精神的な支え】となり、【出産の満足感】につながっていた。パートナーを含めた妊娠期からの継続的な

支援は、その後の育児期にも影響してくるため、継続的な支援が女性だけでなくパートナーの経験についても明らかにすることは、今後の助産師による妊娠期からの父親支援の一助となる。

### 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関係はない。

### 文献

- 1) 公益社団法人日本助産師会, 助産師の声明・綱領, 2006年, <<https://www.midwife.or.jp/midwife/statement.html>>, (閲覧日. 2023.10.22).
- 2) Cochrane : Midwife-led continuity models of care compared with other models of care for women during pregnancy, birth and early parenting <<https://www.cochrane.org/ja/evidence>>, (閲覧日. 2023.10.20).
- 3) 日本助産学会 (2020), エビデンスに基づく助産ガイドライン—妊娠期・分娩期・産褥期 2020, 日本助産学会誌, 33, 12.
- 4) 看護行政研究会編集 (2020), 看護六法令和2年版, 新日本法規出版, 愛知, 1488.
- 5) 藤原弘子, 曾根清美 (2017), 助産学生が受け持つ継続事例における周産期の学びの関連, インターナショナル Nursing Care Research, 16(2), 26
- 6) 中島久美子, 國清恭子, 阪本忍 (2009), 新人助産師の視座から捉えた分娩介助・継続事例実習指導の課題, 日本助産学会誌, 23 (1), 5-15.
- 7) 福丸洋子, 落合亮太, 松坂充子 (2010), 継続事例実習で助産師学生に受け持たれた女性の学生実習に対する思いとその変化, 日本助産学会誌, 24 (2), 322-332.
- 8) N.Tickle, M.Sidebotham, J.Fenwick, J.Gamble. (2016), Women's experiences of having a Bachelor of Midwifery student provide continuity of care, Women Birth, 29(3), 245-51.
- 9) N.Tickle, J.Gamble, D.K.Creedy (2022), Clinical outcomes for women who had continuity of care experiences with midwifery students, Women Birth, 35(2), 184-192
- 10) 福丸洋子, 落合亮太, 松坂充子, 前掲書 7), 322-332.
- 11) N.Tickle, M.Sidebotham, J.Fenwick, J.Gamble., 前掲書 8), 249.
- 12) 福丸洋子, 落合亮太, 松坂充子, 前掲書 7), 322-332.
- 13) I.Aune, K.Haugen, M.Holst-Jenson, et al. (2023), Women's experiences of continuity of care from student midwives—A qualitative study from Norway, Sexual & Reproductive Healthcare, 35,
- 14) 荒木美幸, 中尾優子, 大石和代 (2010), 継続受け持ち事例の女性にとって「支え」となった学生のかかわりについて, 日本助産学会誌, 24 (1), 65-73.
- 15) I.Aune, K.Haugen, M.Holst-Jenson, et al., 前掲書 13), 100814.
- 16) U.Dahlberg, I. Aune (2013), The woman's birth experience—The effect of interpersonal relationships and continuity of care, Midwifery, 29 (4), 407-415.
- 17) 大原良子, 久保田君枝 (2015), 豪州における助産師教育の現状と課題—学士課程での助産師教育開始前後の調査から—, 日本助産学会誌, 29 (2), 227.
- 18) 森兼真理, 五十嵐稔子, 脇田満里子 (2015), 助産学実習における継続事例実習の現状と課題—教育機関による実態調査を通して—, 奈良看護紀要, 11, 18.
- 19) 公益財団法人日本助産師会 助産師のコア・コンピテンシー 2021, <<https://www.midwife.or.jp/midwife/competency.html>>, (閲覧日. 2023.10.17).
- 20) 瀬谷絵莉佳 (2021), 初対面の助産学生に受け持たれた産婦の経験, 母性衛生, 62 (2), 368.
- 21) 厚生労働省, 看護基礎教育検討会報告書, 2019年, <[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_07297.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html)>, (閲覧日. 2023.10.21).

22) 厚生労働省, 看護基礎教育検討会報告書, 2018年, <[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_07297.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html)>, (閲覧日. 2023.11.25).

23) 訳分娩期ケアガイドライン翻訳チーム (2021), WHO 推奨ポジティブな出産体験のための分娩ケア, 医学書院, 35.

24) こども家庭庁, 成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針の変更について, 2023年, <[https://sukoyaka21.cfa.go.jp/about/contact\\_office/](https://sukoyaka21.cfa.go.jp/about/contact_office/)>, (閲覧日. 2023.10.21).